

香 峰

KATSURAGI

—泉州山岳会—

目 次

2003.6 ~ 2003.8

第**332**号
2003

<M チーム>

夏山合宿・劔岳集中 行動概要	2
・源治郎尾根	岡本尚子 3
・ハツ峰上半部	長井裕司 4
・チンネ左稜線	大崎義治 5
・中央チムニー~aバンド~bクラック	角田 浩 6
・源治郎 峰平蔵谷側側壁 下部中谷ルート	北山峰生 8
・リーダー所感	杉山 僚 10
雪彦山・地藏岳東稜	角田 浩 11
屏風岩・雲稜ルート	杉山 僚 12
北岳バットレス・第4尾根	坂口温己 14
日高山脈・幌尻岳~戸蔭別岳	村田和隆 16
大峰・中井谷	島 太一 18
北アルプス・赤木沢	岡本尚子 19
南アルプス・黄蓮谷	湯淺升夫 20

<B チーム>

聖岳~光岳	川崎智子 22
夏山合宿・白馬岳~雪倉岳~朝日岳	松本知子 23
	星野安男 23
・リーダー所感	榎田誠寛 24
山行記録	25
編集後記	26

<Mチーム>

夏山合宿・劔岳集中

2003年8月12日(夜)~2003年8月17日

CL 杉山 僚 SL 北山峰生 西村 晶 有永 寛 長井裕司 名越真理子 山内哲文 大崎義治 岡本尚子 角田 浩 石井浩二 湯淺升夫 山倉康次 永井文雄

行動概要

8/12(火)	夜大阪発 L杉山 西村(晶) 長井 名越 大崎 岡本 角田 石井 湯淺	黒部ダム~ハシゴ谷乗越~真砂沢B.C. 北山 有永
8/13(水)	黒部ダム~ハシゴ谷乗越~真砂沢B.C. L杉山 西村(晶) 長井 名越 大崎 岡本 角田 石井 湯淺	源治郎尾根 峰・平蔵谷側側壁 下部中谷ルート L北山 有永
8/14(木)	真砂沢 B.C.~長次郎右俣~三ノ窓~三ノ窓雪渓~真砂沢B.C.~熊ノ岩B.C. L杉山 西村(晶) 名越 岡本 角田 石井 湯淺	真砂沢B.C.~熊ノ岩B.C. L有永 北山 長井 大崎
	黒部ダム~ハシゴ谷乗越~真砂沢B.C.(本隊と合流)~熊ノ岩B.C. 山内	
	室堂~劔沢 L山倉 永井	
8/15(金)	源治郎尾根 L杉山 西村(晶) 名越 山内 岡本 角田 石井 湯淺	ハツ峰 峰Cフェース~ハツ峰上半部 L有永 北山 長井 大崎
	劔沢~劔岳本峰~池ノ谷乗越~熊ノ岩B.C.(本隊と合流) L山倉 永井	
8/16(土)	チンネ左稜線 L西村(晶) 湯淺 岡本 中央チムニー~aバンド~bクラック L杉山 名越 山内 角田 石井 L山倉 永井	チンネ左稜線 L北山 大崎 中央チムニー~aバンド~bクラック L有永 長井
	ハツ峰 峰 Dフェース 富山大ルート L北山 名越 久留米大ルート L山内 杉山 Aフェース 魚津高ルート L長井 有永	
	熊ノ岩B.C.~長次郎左俣~劔岳本峰~早月尾根~馬場島 全員下山	

8月15日(曇りのち晴れ)

ぼつぼつぼつ、夜中雨の音で目を覚まし、ちょっと安心してまた眠りにつく。これを何度か繰り返したのち、午前4時起床。昨日の雨でまだ濡れている靴やザックを思うと、かなり気が重い。天気のリcoveryを待って、5時40分出発。もしや、と内心ヒヤヒヤしていたが、ルート研究をしていた私が先頭で行くことになった。長次郎谷出合を左にルートをとってまもなく、名越さんの「岡本さん、こっち」の声に振り返ると、一人だけ剣沢雪渓をかなり左側に寄って歩いていた。右上方に源治郎尾根取り付きが見えている。きゃっ恥ずかしい……この先を考えるとドキドキするが、最初からみなを惑わしてしまい、不安を覚えたのは私以外の人のほうだろう。取り付きの前でアイゼンを外し登攀具を着用する。

源治郎尾根はいきなり急登で始まった。岩場あり、木登りあり、ジグザグに次々と難関？を突破していくみたいで、すごく楽しい。途中の岩場で2箇所ザイルを使用、西村さんと山内さんにトップをお願いする。気が重かったのが嘘のような雨上がりの青い空の下、平蔵谷を見下ろしながら、あっという間に高度をかせいであるのもうれしくなる。しかしこの余裕もつかの間、踏み跡をたどり登っていくが、所々ルートが分かれていて、どちらのほうかより登りやすいのか判断がつかない。迷った末に選んだルートのほとんどは、なぜかスリリングで危険なルートばかり。ルートを間違え、斜面をトラバースしようとしたところで、私の足元の草つきが幅1メートルほどごっそり崩れ落下、思わず叫ぶ。目の前のやさしい道を見逃し、横の小さなルンゼに入ったのはよいが、土混じりのガレ場で足を置く所さえない。仕方なく雪上のキックステップの要領で足場を作って登っていると、山内さんから「それは危ないよ」と注意を受け

る。案の定、すさまじい轟音とともに巨大な落石を引き起こしてしまった。みんなが安全に登れるよう道を選ぶことの難しさを実感し、先頭なのに落石ばかり起こして情けなくなる。

峰へはすぐ着くよ、という言葉が信じられないくらい 峰から見ると 峰は大きかった。12時10分 峰懸垂地点に到着。突端はスパッと切れ落ちた断崖になっていて、ものすごい高度感に腰がひける。一人一人順番に慎重に、そして想像していたよりはずっと快適に？懸垂下降を終える。あとは、目の前に大きくそびえる剣岳本峰をめざすのみ。「もうちょっと、もうちょっと」と励ましあい、「もうちょっと、とはいいたいどれくらいの時間のことを言うのか？」などとわいわいしゃべりながら、もうその頃には岩場を楽しむ余裕はまったくなく、落石王の名をほしいまま……にしないよう気をつけながら、のろのろと進む。「祠が見えた！」西村さんの声で一気に足取りも軽くなり、14時過ぎ念願の本峰に登頂！！

頂上で記念撮影後、長次郎のコルより長次郎谷左俣をくだり、15時40分無事熊ノ岩BCに到着。夕食までの時間、まだ濡れているシュラフや靴を外に干し、落ちてゆく陽に包まれて穏やかなひとときを過ごした。

一昨年前の春山合宿で、奥大日岳から見た剣岳本峰の岩と雪をまとった圧倒的な美しさが、ずっと臉に焼きついていて。叶ってしまえば夢じゃなくなる気がして、それを自分の臆病さの言い訳にして、いつも一歩踏み出す勇気が持てなかった私だが、今回初めて夏山合宿に参加し、「いつか」がやっと「今」になった気がする。反省すべきこと、今後の課題は山ほどあるが、あの充実した5日間は本当に夢のようで、目をとじていてもあの風景を思い出す。今もまだ心だけ遠く剣に残してきたかのようです。

ハッ峰上半部

長井裕司

当初の計画では、メンバーは有永、大崎、長井のおじさんトリオでほのぼのモードであったが、欠員の関係で北山さんが加わった為、いきなり戦闘モードに切り替わってしまった。名越さんが言った。「長井さん顔が引きつっていますよ」

8月14日(雨)

予想通り朝から雨である。とりあえず長次郎谷を・のコルまで登る。10年ぶりの冷夏のせいかすこぶる寒い。高度を増すごとに雨も強くなっていく。いつもはカップの下はパンツとシャツだけなのだが、我慢出来ず雨の中カップを脱いでズボンと長袖を着込む。

ツェルトをかぶり作戦会議。温かい飲み物を作るも体のふるえは止まらない。有永さんと北山さんは去年の合宿でも雨の中ハッ峰を縦走している。当然今回も突っ込むだろう。暗い顔の私と大崎さん。しばし熟考の末、有永さんが一言「やめとこ」。この2人イケイケだけでは無かったのである。ひと安心。この状態なら中止すべきという経験値がひとつ増えた。

本日の行動が中止になったので、明日以降に期待すべく真砂沢から熊ノ岩にテントを上げて待つことに専念する。

8月15日(曇りのち晴れ)

夜中激しい雨。「こりゃあ今日は沈だな」と勝手に決めてる内に眠りにつく。朝を迎えると予想に反し小雨。気分を切り替え出発する。

計画では 峰のDフェースから登る予定だったが、岩が濡れている為Cフェースからアプローチする。軽量化の為、4人でザイル3本という変則的な組み合わせでトップを交代しながら登る。3年前同じルートを登った時落石にあり、真剣にこんな危険な事は止めようと考えたことがあったが、今懲りずにこうして登っている自分が不思議に思えた。手が滑らないように

注意しながら登攀終了。この頃から雨の心配はなくなって来た。

・のコルを懸垂下降すると、はっきりとした踏み跡が現れる。しかし、これはチンネの頭に行く巻道らしい。ハッ峰を縦走すべく出来るだけ稜線に近いルートを登ったり下降したりして進む。こうなるとほとんど勘と経験の世界である。

峰から短い懸垂2ピッチで字コル。そこからハッ峰の頭に登るとそこそこ広いスペースに出る。後ろにチンネのシルエットが現れてここで写真を1枚と言いたいところだが、残念ながらフィルム切れであった。あとは池ノ谷乗越に降りて終了である。北山さんも去年の消化不良気味の縦走から、今日はスカッと登れて満足した様子であった。

長次郎の右股の雪渓を下り熊ノ岩のテント場にもどる。前回は6本爪のアイゼンで難儀したが、今回は10本爪を購入。懐は痛かったが快適であった。それでも1回こけて滑落停止する羽目に。

熊ノ岩からは 峰の各フェースが真横に見え先ほど登ってきたハッ峰も望める。周りを見渡せばまさに別世界に来たようで絶景である。劔岳に来るのは5回目になり、親しみも感じるようになった。有永さんがハッ峰を縦走中に「ここは雪があるときはこうなって...」と言う話を聞いていると、私自身特に行きたいルートはいまだに無いのであるが、残雪期のハッ峰を縦走してみたいと思うようになった。あとはトレーニングするのみである。

<行動記録>

熊ノ岩 B.C.6:20~ハッ峰 峰 C フェース終了点 9:10 - 9:30~ハッ峰の頭 12:20 - 12:40~熊ノ岩 B.C.13:20

チンネ左稜線

大崎義治

8月16日(快晴)

星空のもと、熊ノ岩のテントサイトを出発。長次郎谷右俣の雪渓上には、すでに2つのヘッドランプが動いていた。池ノ谷乗越手前で先行パーティを追い越すころにはヘッドランプを消すほどに明るい。ガリーを下ると三ノ窓に朝日が差し込み、雪渓が金色に染まる。再びアイゼンをつけて雪渓上に歩を進めれば、ピバークのツェルトから這い出して様子をうかがう人影、紛れもなくわれわれが一番乗りである。

取付きは雪渓に埋まっている。1P目終了点のテラスに上がり、事実上のスタートとなる2P目を北山さんがリード、ルンゼ状の凹角を越え、以後トップを交代しながら登る。3P目は左のフェースからクラックを拾いながらバンドへ達する。ザイルに余裕があるので切らずにさらに伸ばす。傾斜は緩いがや、脆い部分を超えて3P目を切る。ピッチは必ずしもルート図通りには切らず、伸ばせるところは伸ばした。岩角やハイマツなどを確保支点とすることもしばしばだった。5P目あたりから稜線に飛び出す。涼風吹き渡る空間に身体を置いての登攀は痺れるような快感である。乾いた硬い岩肌のフリクションは思いのまま。核心部の9P目。北山さんが先ず右のカンテに身を張り出してプロテクションを細かく取りながら、今度は左に回ってハングを越えてゆく。大崎がフォロー、足場が安定せず腕に負担がかかる。プロテクションの回収に手間取って右手がパンプ、残置シュリングを左手で掴み右のカンテに体を寄せてしばし休憩の後、ハング上のガバを引き寄せて一気に乗っ越した。10P目、傾斜のある狭い、高度感満点のリッジだが、フリクションが効いて爽快そのもの。右下に中央チムニーを登る名越・山内、有永・長井の両パーティが見え、“オーホイ！”とエールを送る。

11P以降は、いくつかのピクナルと狭いリッジ。傾斜はなく登るといってもトラバースに近い。しかも、両側が切れているので気を抜けない。ザイルが水平に伸びているのでもしトップが落ちれば大きく振られることになる。ここでもプロテクションを細かく取ってゆく。登攀開始から3時間20分を要して、チンネの頭に到着した。ここからは昨日縦走したハッ峰上半部が指呼の間に一望され、クレオパトラ・ニードルからハッ峰 峰に至る巻道など周辺の地理が手に取るようだ。

下山はこの巻道を取った。途中、有永・北山・長井・名越・山内の5人がクレオパトラ・ニードルに登攀(本会初?)。ニードル基部から峰の科尔までは悪い箇所があり、通常はザイルを出すらしい。峰の科尔から峰への急登はザイルをフィックスしてプルーリックで連続登攀、の科尔の真上までは歩いて降り、1P約40mの懸垂と10mのクライムダウンで科尔に降り立った。懸垂支点はAフェースの頭からも取れる。

<行動記録>

熊ノ岩 B.C.4:10 ~ 三ノ窓 5:15 ~ 左稜線 2P目テラス 5:30 ~ 登攀開始 5:50 ~ チンネの頭 9:10 ~ の科尔 12:45 ~ 熊ノ岩 B.C.14:00

中央チムニー～aバンド, bクラック

角田 浩

8月16日(快晴)

いよいよチムニーに登る日が来た。前夜、トイレに立つと満天の星。そのまま朝まで天気が変わらないで欲しいと願って寝たが、3時半に起床して外に出ると、前夜と変わらず上天気。途端に気分が高揚してくる。

慌しく準備を済ませ、長次郎谷の右俣を池ノ谷乗越めざし出発する。急にハーネスをザックに入れたか、不安になってくる。迷惑とは思いつつながらリーダーにお願いし、再度ザックの中身を点検させてもらう。ハーネスもクライミングシューズも入っていることを確認して、ひと安心する。

半分ほど雪渓を登ったところで、日の出となり、山が朝焼けに染まり始めた。たまたま、ウェストポーチからカメラを取り出し、撮影しようとする。が、シャッタースピードが遅く、手ブレしそうだ。とっさに横にいた石井君に声を掛ける。石井君は自分を撮ってもらえと思い、少し距離をとろうとするが、逆に近くに来るようにいわれて怪訝な表情をする。声を掛けたのは、石井君の背中を三脚代わりに使わせてもらうため。おかげでシャープな写真が撮れたが、三脚になった石井君は憮然としていた。申し訳ありませんでした。

池ノ谷乗越から池ノ谷ガリを落石に気をつけながら下り、三ノ窓に出る。2日前にラウンドでここを通過した時には、ガスで全く見えなかったチムニーの姿を初めて目の当たりにする。でかい!というのが第一印象だが、不思議と怖れの気持ちはなかった。

雪渓を渡り、チムニーの取り付きまで岩場を登る。確保はないのでスリップは許されず、結構緊張する。チムニーの真下に出て、いよいよ登攀が始まる。先発は山内さん・名越さん。続

いて長井さん・有永さんが登っていく。我々の後には、山倉さん・永井さんのOB組が控えているのが心強い。1P目はチムニー右側の壁を登り、途中から右のカンテを登る。囲まれ感のあるチムニーから、開放的なカンテに出るときが緊張するが、そのままチムニーの内側に行く方が難しそうである。

2P目は、左からの岩の出っぱりをよけて、右に体を乗り出す最初の部分が少し怖い。しかし、そのあとのフェースを登るあたりから、緊張が解けて登るのが楽しくなってきた。練習で通った不動岩の方が斜度がきつく、ホールドも細かいと思えたことが、心に余裕をもたらしたのかも知れない。

チムニーを抜けると、斜度の落ちた草付に出る。ここからaバンドの取り付きまでコンテで右上する。3P目はaバンドのトラバースである。ここで杉山さんから、先に行くよう指示がでる。できるだけこまめにランニングをとるようアドバイスを受け、石井君が先行し、自分が続く。トラバース中に初めてじっくりと下を眺めた。天気は快晴で、すべてが見渡せる。なるほど凄い高度感だが、高すぎて恐怖を感じない。しかし、確保している石井君を見ると、凄い所に立っている。「お互いえらい所にいるなぁ」と石井君に声を掛け、苦笑する。

4P目はbクラックを直上する。手足を置く場所を落ち着いて探しながら登る。5P目のガリを抜けると、そこはもうチムニーの頭であった。何かすごくあっさり終わってしまった、という感じがまず起こり、それから無事登れたという喜びが湧いてきた。と、突然左の方から人の叫ぶ声がある。そちらを向くと、鋭い岩峰(クレオパトラニードルというらしい)の上に何人かの人たちが群がっている。「怪しい、かわりに

ならんとこ」と気弱な自分は顔をそむけるが、杉山さんが「写真撮れって言うてるで」と言う。よく見ると、先行して登っていった先輩達だった。

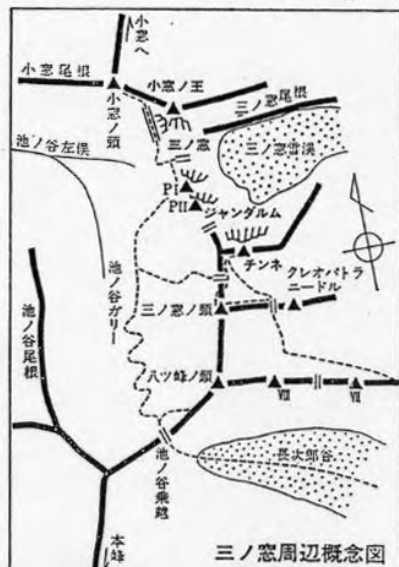
下山はハツ峰の巻き道から、 \cdot のコルに懸垂で下るルートを取る。下山路といっても一般路とは違うので、落ちたらあかん！のトラバースもあり、岩峰の登りもノーザイルの箇所が多く、コルにたどり着いた時には結構疲れを感じていた。それで、杉山さんが 峰Cフェースを登ろうと、誘ってくれたのを辞退してしまった。杉山さんは自分達に岩登りの楽しさをさらに経験してもらおうと、誘ってくれたので申し訳なかった。石井君は自分が行くと言ったら、行くつもりだったと後で言っていたので、石井君にも悪いことをしてしまった。結局、大崎さんと石井君の三人で熊ノ岩のベースにもどり、その後は先輩達が 峰Dフェースを登るのを眺めながら、午後の時を過ごした。

今回のチンネは、自分にとって初の本チャンで、本当に心に残る出来事となった。それまでのトレーニングによる裏づけを感じることができたので、落ち着いて登れたことが何よりの収穫で、少しだけ自信もついた。しかし、カラビナの掛け方を間違えたり、懸垂のセットにもたついたり、相変わらず基礎の怪しい部分も多々ある。今後さらに練習を積んで、基礎を確実にマスターしていきたいと思っている。6年前に池ノ平から初めてチンネを眺めた時には、それは登る対象ではなかった。その頂に立つことができたのは、多くの方々のご指導の賜物と感謝しています。

<行動記録>

熊ノ岩 B.C.4:45 ~ 三ノ窓 5:20 ~ 中央チムニー 取付 7:00 ~ 中央バンド 8:45 ~ 終了点(チンネの頭) 10:00 ~ \cdot のコル 12:45 ~ 熊ノ岩 B.C.14:00

- ① 左後線ルート
- ② 下部ベルニナルート
- ③ 左下カンテルート
- ④ 左方ルンゼルート
- ⑤ 中央チムニー左フェース魚津高ルート
- ⑥ 同ベルニナルート
- ⑦ 中央チムニールート
- ⑧ 北条・新村ルート
- ⑨ 登攀倶楽部ルート
- ⑩ 右方ルンゼルート
- ⑪ 積水ルート
- ⑫ 左方カンテルート
- ⑬ 筑豊ルート
- ⑭ hクラックダイレクトルート
- ⑮ hクラックオリジナルルート
- ⑯ 右後線ルート
- ⑰ aバンド
- ⑱ bクラック
- ⑲ cクラック
- ⑳ dクラック
- ㉑ eクラック
- ㉒ fクラック
- ㉓ gチムニー



8月13日(晴れ)

夕べは冷え込みがきつく、一晩中ふるえが止まらなかった。入山時の土砂降りですべて濡れていたせいもあっただろうが、大陸の高気圧が冷気を吹き込んだのではないかと、という有永さんの話だった。この一晩の記憶が、合宿の間中トラウマのようにつきまとうことになる。

さて、あけてみると天気は上々、颯爽と源治郎末端をめざす。平蔵谷をほどほどに詰めて、適当なところで側壁をじっくり観察する。中央ルンゼに大岩溝は.....?なにぶん昨日の大雨のあとのこと、当初予定していた中央ルンゼはあっさり諦めて、中谷ルートに取り付くこととする。

雪渓末端は巨大なシュルンドが口を開けており、ちょっと下降できそうにない。雪キノコを切って、岩壁基部へ懸垂下降。不安定なガレ場に降り立って、1Pめはそのままアイゼンで草付バンドをつめる。このピッチの終わりにちょっとしたテラスがあったので、ここで靴を履き替え、登攀体制を整える。

2Pめ、有永さんリードでスタート。全体的にじめじめ湿って、気持ち悪いことこの上なし。出だしの一步を越えるのに、スタンスが甘くて苦労する。乾いていれば何の問題もなさそうなのに。つづく人工ラインは淡々と駆け上がる。が、大半のポルトが抜けかけ寸前。芯は折れ曲がり、チップが完全に露出している。ほとんど錆の膨張だけでもってるようなもんだ。

3Pめ、ちっさなハング下を左のリッジへ回り込む。見上げると稜線のむこうに青空が気持ちよく広がっているのだが、ここは西面にあたるため、まったく日が差さない。こんなに晴れるのに寒くてたまらない。岩もじめじめと乾かない筈だ。

4Pめ、これもフリクションの悪さを恨めし

く思いながら、ひたすらフォロー。

そして前半の核心部、5Pめ「級のトラバース」。ツェルトのなかでルート図を検討しつつ、何度も強気と弱気の交錯した嫌な部分。できることならリードは避けたかったのだが。

実際眺めてみると、傾斜はさほどなさそうだが。しかしこのヌルヌル感はたまらなく緊張させられる。これが「級」たる所以であろう。前半こそ順調に進むものの、後半がきわどくて、かなり時間をかけて通過。

6Pめ、左手の小さなクラックを抜けるとアンカーのピンがあった。ここでピッチを切れれば良かった。さっきは不安定な体勢で確保していたため、腰が痛くなった。

7Pめ、いよいよ佳境にさしかかる。いわゆる「大岩溝」だ。去年の夏合宿、入山時に劔沢からながめた側壁。まさにこの大岩溝を1パーティが登っている最中だった。あの時は「なんちゅうおとろしいトコ、行ってるんや」など思っていて、まさか一年後に自分が来るとはまったく予想だにできなかった。

まずは洞穴状テラスで腹ごしらえ。気持ちも新たに、巨大ルンゼに突入する。いろいろな人の記録に書かれている通り、極めて不安定。まさに浮き石の巣窟で、触れるものすべてがグラグラ動く。どれだけ慎重に動いても、何度か石を落としてしまう。ザイルに直撃でもしたらお終いや、と心で悲鳴を上げながら、「ラクッ」と声を張り上げる。

崩壊した岩の間をチムニー登りですり抜け、最後はチョックストーンの下をくぐり抜けて、なんとかピッチを切る。途中、恐ろしさのあまり力一杯つっこんだフレンズが、回収不能となってしまった。まったくこんな所を登るのは二度とごめんだ。

8Pめ、大岩溝をぬけても、岩のもろさは変わ

らない。左手のリッジめざして登っていく。

そして9Pめ、これで終了か？淡い期待とともに登り出す。リッジが途切れたところから、ルートは右手のフェイスへと屈曲する。終了点間際のピッチは、往々にして「やさしいフェイス」とか書かれているけど、これが決して易しくはない。緊張のせいでそう思うのだろうか？

ルートの取り方を誤って、中途半端な地点でピッチを切ってしまう、10Pめでフェイスをぬけると、そのままブッシュの中の踏み跡をたどっていった。これでやっと下部岩壁終了、6時間近くかかっていた。

さて上部岩壁は……。名古屋大ルートへとつなぐ予定にしていたが、もう少し時間に余裕がほしかったし、夕立が来そうな気配もしたので、あきらめて降りることとした。

強烈なブッシュをこいで、源治郎の縦走路へ飛び出す。ここからは、登るが早いか、降りるが早いか。しばし迷ったが、後者を選択。もしかしたら、峰まで登った方が早かったかも、とも思うが。

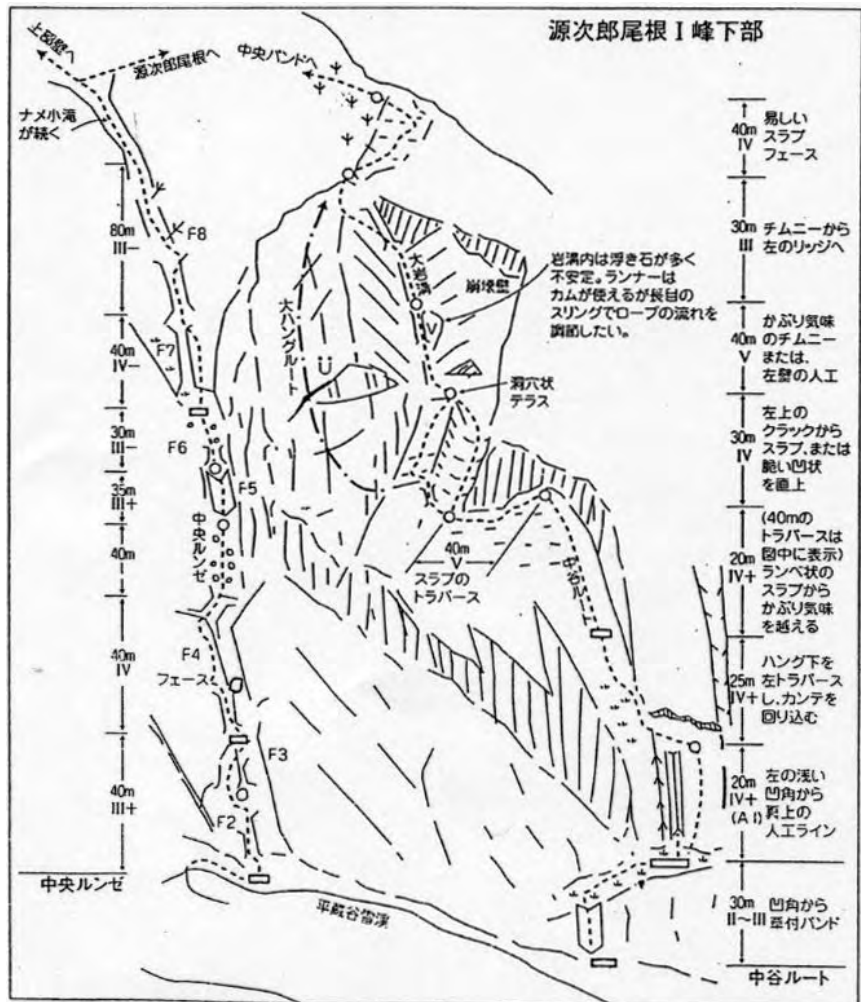
西側から見た峰は均整な尖峰で、スケールも大きく、ぜひとも下から壁づたいにあのピークまで行きたかった。それだけに、今回上部を

割愛したことは、本当に悔やまれる。なぜなら、もう2度とこの下部岩壁には取り付きたくないと思ったから。それほどに、この中谷ルートは登り切った充実感以上に、気持ち悪さだけが記憶に残るルートだった。

今度行くとすれば、ルンゼの悪い部分が雪で埋もれて、ガチガチに凍った時がチャンスかもしれない。

<行動記録>

真砂沢 B.C.5:00~平蔵谷出合 6:00~中谷ルート 1Pめ終了点 8:00-8:30~洞穴状テラス 10:50~終了点 14:20~源治郎尾根縦走路 15:20~平蔵谷出合 17:20~真砂沢 B.C.17:45



今年の夏山合宿は、昨年に引き続いて劔岳になりました。しかし、今年の参加メンバーの大半が昨年の夏山合宿を経験しており、行動能力や登攀技術のレベルアップをテーマに掲げた昨年に対して、今年はどうのような意味づけで合宿を行うのが問題となりました。現在の実力で登れる岩場は昨年と大きくは変わらず、同じ考え方で合宿を行っても、それほど進歩がないと思ったからです。そこで、今年の合宿は2つの基本的な方針で進めることにしました。

1. 劔岳の概念や大きさを知り視野を広げる

「どのような山に登りたいか？」という質問をしたとき、「よくわかりません」という答えが返ってくる場合があります。これは、山の楽しみ方や、登ったら楽しい山がどこにあるのかわからないことが原因の1つになっています。「岩登り」や「沢登り」を初めて経験したとき、知らなかった世界の楽しさを知ることで、登りたい対象が広がっていった経験をしたことがあると思いますが、このように、知ることによって視野が広がり、まだ見ぬ世界に対して登攀意欲が高まっていくこともレベルアップの1つではないでしょうか。

今年の夏山合宿では、源治郎尾根やハッ峰、チンネといった個別的な岩場を登ることよりも、むしろ、劔岳を大きく捉えることを重視しました。黒部湖から入山して真砂沢に入り、下山には劔岳本峰を越えて早月尾根を下るという劔岳縦断の合宿を提案しました。また、残念ながら雨で中止になりましたが、当初は、三ノ窓から池平山や仙人池を通して、真砂沢にラウンドする山行も計画していました。

黒部ダムからは大タテガビンの岩場、内蔵助谷では丸山東壁を見ることができ、ハシゴ谷乗越では、北方稜線から仙人山に至る稜線の大きさに驚いた人もいるのではないのでしょうか。ま

た、チンネの岩場では、ハッ峰や池平山、仙人池、ガンドウ尾根、小窓尾根などが一望に見渡せました。源治郎尾根やハッ峰、チンネというのは劔岳の一部にすぎず、実力をつければ登攀対象となる岩場や尾根がたくさんあることを、感覚的に知ってもらいたかったからです。

2. ビバークを取り入れ行動の幅を広げる

もう1つの方針として、行動の幅を広げるためにビバークを山行の中に取り入れることを考えました。劔尾根主稜と六峰フェース、源治郎尾根とチンネ、ハッ峰上半部とチンネの各ルートにおいて、1ビバークで2つの岩場を継続する山行を計画していましたが、天候などの関係で、残念ながらビバークは中止になりました。また、劔尾根主稜も中止になりました。

源治郎尾根やハッ峰、チンネということで、昨年とほとんど同じような合宿になりましたが、今回の大きな目標の1つであった「視野を広げる」という意図は伝わったでしょうか。

山域研究やルート研究を行って興味のある山をみつけ、自分自身で動機付けを行い、目標の山を登るために必要なトレーニングを自分で設定する。これは山を登るための基本的なことだと思いますが、登山活動を自ら発展させていくためには、視野を広くもつことが重要です。

実際には、山行の経験を積み重ねることで視野も広がっていくものであり、簡単に広がるものではないことも事実ですが、今回の劔岳での合宿が、それぞれの人が登山活動を発展させていく1つのきっかけになればと思っています。

もちろん、視野を広げるというのは、劔岳に限ったことではありません。そういう意味では、今年の夏山合宿の成果というのは、それぞれの人の今後の活動にかかっているといっても過言ではないかもしれません。

2003年7月5日(夜)~7月6日

L 杉山 僚 北山峰生 木下春雄 大崎義治 坂口温己 岡本尚子 石井浩二 角田 浩 湯浅升夫

小雨の降る中、雪彦山の麓にある賀野(かや)神社の駐車場に車を止め、境内に絶好の雨宿りの場所を見つけ、小宴の後寝る。

7月6日(曇り)

目がさめると雨は上がっていたが、空はどんより曇っている。境内からは地蔵岳の岩峰がガスの中に浮かび、さながら水墨画の世界だ。いつもならカメラを出して一枚撮るところだが、いまはその余裕がない。今日はあそこに登るのだ。本当に?というのが偽らざる第一印象。しかし、練習で通った不動岩も駅から見たら直立して見える。きっと下まで行ったら何とかなるだろうと気を取り直し、準備を急いだ。

展望台まで車であがり、付近の入り口から裏登山道へと下り、不行沢沿いに取り付きをめざす。前日下見に行った石井君がヒルにやられたと聞き警戒していたが、湯浅君にチビヒルが一匹付いていただけで実害はなかった。

取り付きまで来てみると、先程直立して見えた岩壁は登れそうな角度となり、ひと安心する。しかし出だしのスラブは曲者で、前夜の雨で滑りやすく、皆登りにくそうにしている。自分は杉山さんと組んで最終組。まず杉山さんが慎重にトップを歩き、続いて私。しかし、いきなりランニングの回収に失敗して、ヌンチャクを下に落としてしまう。見捨てるには忍びず、杉山さんに確保してもらい、クライムダウンしてヌンチャクを回収した。いきなりミスしてしまい、がっくりくる。

ビレイ点まで登ると、追い討ちをかけるように、次ピッチをトップで行けとの指示。トップは不動で1回しか経験がなかったので、緊張で頭の中が真っ白になる。ルートを確認すること

なく、いきなり目の前の斜面に取り付き、行き詰まってしまう。気を落ち着けてよく見ると、左に簡単に登れるルートがあった。

結局スラブに3ピッチ(通常は2ピッチ)費やし、いよいよ核心の段差に至る。慎重に手足を置くポイントを探して段差を乗越え、そのまま右斜上するバンドに入り、斜度の落ちたスラブを登ると、ブッシュ帯に至る。コンテでブッシュ帯を抜けると、馬の背の下に着く。このころから天候も回復して太陽が顔を出すようになり、岩も乾いてきた。ようやく緊張も解けてきたこともあって、このコンテは気持ちよく登ることができた。再びコンテで小ピークを越えてコルに下ると、最終ピッチの取り付きに出る。凹角からチムニーを抜けると、そこは皆の待っている地蔵岳山頂だった。

帰路は大天井岳から出雲岩經由で下山したが、かなりの急坂が続き、標高こそ高くはないが、険しい山であることが実感できた。古来この山が修験道の行場であることも頷けた。

今春Mチームにあがり、岩登りの世界に触れるようになった。初めて不動岩で練習した時には、高度感に足が震え、この先ついて行けるか大いに不安になった。しかし、2度3度と足を運ぶうちに少しずつ慣れてきた。今回も出だしは緊張してミスを連発したが、途中から登るのが楽しくなってきた。夏山合宿ではチンネに登ると聞いているが、その時どんな世界が自分の前に開けてくるのか、まだまだ不安だが、同時に少しずつ楽しみにもなってきた。

<行動記録>

賀野神社 6:00 ~ 東稜取付 6:30 ~ 地蔵岳山頂 10:15 ~ 下山 12:20

<Mチーム>

屏風岩・雲稜ルート

杉山 僚

2003年7月18日(夜)~7月21日

L北山峰生 杉山 僚

昨年は錫杖岳を登り、今年は屏風岩と想っていたが、北山さんに誘ってもらって、早い時期に実現した。ただし、北尾根を継続して前穂高岳まで抜けるという計画である。しかし、この連休は雨の予報で、今回の屏風岩はさすがに無理ではないかと思っていた。

7月19日(雨)

予想通り雨。「雨が止んで風が吹けば、岩場はすぐに乾く」ということで、いつでも出発できる体勢で雨が上がるのを待った。しかし、雨足は強くなるだけ。横尾で停滞となった。

7月20日(曇りのち雨)

夜中に雨がパラパラと降っていて、やはりダメかなと思っていたが、目が覚めると雨は止んでいた。さっそく準備を整えて屏風岩を目指す。岩小舎跡からの横尾谷の渡渉は、水が冷たかったが問題はなかった。天気は曇りで、いつ雨が降ってもおかしくない状態。屏風岩には誰も取り付いている気配はない。

T4尾根 1P、北山さんのリード。漠然としたフェースで幕開け。ピンが少なく、下部が濡れていて気持ちが悪い。身体がまだ目覚めてなくて動きが鈍い。

2P、。というグレードは、私にはフリーで登るには難しいグレードだ。案の定、目の前のピンにカラビナをかけ、A0を繰り返さないと越えることができなかった。先が思いやられる。この頃から少し日が差し始めた。灌木とブッシュの間をコンテで抜けると雲稜ルートの取り付きに着いた。

雲稜ルート 1P、高度感抜群の凹角。北山さんが足を開いて華麗に登っていく。写真を撮るには抜群のシチュエーション。ここでは、カメ

ラを出す余裕がまだあった。最後の小ハングはかなり時間がかかっていたが、結局A0で抜けたようだ。私は、この小ハングをA0で越えることができず、セカンドであるにもかかわらず落ちてしまった。アブミを出して何とか通過。

2P、杉山リード。目の前の壁をA0で乗り越えたのは良かったが、そこでルートがわからなくなった。真上か？右上か？と岩場を眺めていたが、とても登れそうには思えない。10分以上も考え込んでしまい、時間だけがどんどん過ぎていく。ふと右手を見ると、遠く5mほど先にピンが見えた。もしかしたら、ここはトラバースするのだろうか？でも、ホールドもスタンスも細かく、フリーで登るには私の実力を越えている。結局、ルート図にアブミ使用の指定はないが、アブミの掛け替えを2回行って、スタンスのあるところに移動した。その後も、とてもフリーで登れるような気がせず、しかたなく延々とA0を繰り返して右上し、もう少しで「泣き」が入りそうだったが、何とかピナクルに到達した。そして、息も絶え絶え扇岩テラスまで左上した。

3P、北山さんリード。ひたすら人工登攀で垂壁を直上。ピンが近いので、駒形岩のアブミルートよりも易しかった。この段階で、ついに雨が降り始めた。時折、雨足が強くなった。もう、半分以上来ているので登るしかない。これまでの難しさを考えると、雨の中を本当に切り切れるのか不安になる。

4P、杉山リード。ハング下のバンドを10mほどトラバースする。身体をバンドから外に放り出さないとトラバースができない。バンドに身体を戻し、今度は壁のピンでA0をして、壁

をこのようなアクロバチックな体勢でバンドの中を移動した。最後の切れ落ちた岩も越えて、何とかランゼに逃げ込んだ。

5P、北山さんが、かぶり気味のフェースを登る。簡単そうに見えるが、かなり苦労しているようだった。実際、ホールドやスタンスが細かく、雨で濡れていることもあって、セカンドで登るのも難しく、北山さんがどうやって登ったのかわからなかった。結局、ザイルをつかんで力づくで乗り越えた。

6P、^{*}のスラブ。雨で、スラブがナメ滝状態になっている。とんでもないところに来たものだ。細かいスタンスを拾って2mくらい登ると、行き詰まってしまった。クラックが左上に走っていて小ハングがあり、その先は見えない。しかたなくA0できるピンを探し、ヌンチャクの掛け替えで登る。小ハングの前で足場がなくなり、しばらく考え込んでしまったが、アブミがあることを思い出し、アブミを掛け替えて越えた。今度はピンがなくなったので、フレンズをクラックに放りこみ、A0の支点を作って通過。結局、A0とアブミを繰り返して、40mのスラブをクラック沿いに登った。A0ができなくなったら終わりだったが、メジャールートだけあってピンは連打されていた。

7P、北山さんのリード。6P目と同じような感じでスラブがつづく。小雨が降っている。

8P、最終ピッチ。目の前の壁に3箇所くらいヌンチャクを掛け、力づくで壁を越えた。今度は、目の前のクラックにフレンズを放り込み、ズルツといきそうな気持ちが悪い草つきをマントリングで越えた。ここまで飲まず食わずで、体力と精神力が限界に来ていて、身体が動かなくなってきた。最後の草つきのランゼは雨でズルズルに濡れていて、岩の部分を拾いながら登る。ピンがほとんどなく、気が付いたら15mくらいノーピンで登っていた。集中力が途切れそうまで足が震えだしたが、やっとハーケンが出てきてランニングをとる。肉体的にも精神的にも

疲れ果てて、終了点に到達したときには2時を回っていた。

これで終わりと思っていたが、屏風の頭まで行くには、今度は、雨で濡れた草付きを登らなければならなかった。この草付きがまた気持ち悪く、集中力が途切れたら滑落しそうな斜面がつづく。結局、息を抜くところが無いような斜面を30分くらい登った。

今日は屏風の頭でビバーク。小雨の中でツェルトを張り、防水のきかないツェルトだったが全く気にならず、雨漏りの中ではあったが熟睡した。

7月21日(雨)

当初の予定では、北尾根から前穂高岳まで継続することになっていた。しかし、21日も土砂降りの雨で、2人とも疲労が激しかったこともあって、パノラマコースを使って上高地に下山した。

今回の屏風岩は雨で無理だと思っていたが、北山さんの好判断で1チャンスを捉えて登ることができた。途中から雨になり、本番の岩場を雨の中で登ったのも初めてだった。7月ということで時期が早くトレーニング量が十分でなかったが、悪天候の中、自分自身の責任のあるピッチを、とりあえず何でもありで登り切ることができたことは自信になった。それとともに、今の私の登攀力ではフリーで登れるところは少なく、屏風岩を登るには、明らかに登攀力が不足しているということを実感した。

<行動記録>

7/19 上高地 5:30 ~ 横尾 7:30

7/20 横尾 4:30 ~ T4 尾根取付 5:45 ~ 雲稜ルート取付 8:00 ~ 終了点 14:10 ~ 屏風の頭 16:00

7/21 屏風の頭 4:30 ~ 最低コル 5:25 ~ 徳沢 7:35 ~ 上高地 9:05

2003年7月18日(夜)~7月21日

CL 大崎義治 SL 坂口温己 石井浩二 湯浅升夫 有永 寛

7月18日(曇りのち雨)

海の日を含んだ連休は夏真っ盛り!と期待していたが、今年はオホーツク気団の勢力が強く、7月の終わりまで長い梅雨が続いた。梅雨の最中のバットレスでした。

南アルプス林道の側面崩落のため、戸台大橋よりバスで広河原(登山口)へ。深夜、戸台大橋に到着すると、駐車場は大型観光バスや一般の車であふれかえっていた。奥にテントを張り早速仮眠。外では雨が降っていたが、高らかにしゃべる人々、宴会中の一行など、その騒ぎぶりはとても夜中の3時とは思えない。

7月19日(雨のち曇り)

朝一のバスに乗り9時広河原。雨足は強くないが降ったり止んだりの中、白根御池小屋のテント場11時。テント設営、しばしの休息後、偵察に向かう。有永さんと私はテント番、天気図を取って帰りを待つ。偵察では、下部岩壁の取り付けはシュルンドに囲まれていて、越えられないかもしれないとの事。一気に不安になる。天気は前線と前線の間に入り、何とか良くなる気配である。テントの外では霧が晴れて鳳凰三山が姿を現す。先刻とは打って変わった色鮮やかな山並みを見つめていると、先程の心配はどこへやら、明日への希望に溢れてきた。

7月20日(曇り)

白根小池小屋4時出発。私たちは、下部岩壁のbガリー大滝から第4尾根主稜を登り、北岳山頂をめざす。雪溪の残る大樺沢を左俣に進む、引き返さなければならぬことも考えて踏み跡のしっかりしたc沢の右岸を詰めた。高山植物が美しい道である。ガスは絶え間なく上がったりがったり。不意に「ガスが上がるまでここ

らで休憩しよか」と有永さんの声。ザックを下ろしてしばらく、突然目の前に立ちふさがる岩壁!さっきまで何も見えなかったけどここは下部岩壁の目前だったのだ。沢を振り返ると深緑と雪溪の白の間だったコントラストがまぶしい。初めて見た巨大な岩場の光景はしっとりと胸を打ち、とっさにこの感動を一生忘れないと思った。一方、皆は如何にして目の前のシュルンドを越えるかに頭を悩まし続けていた。私だけが浮かれていた事によろやく気づき、大変恥ずかしいと思った。周囲を見ると、スニーカーの夫妻は、雪溪を警戒して安全な所まで下り、登り返している。後から来た手慣れたパーティーはザイルを出してシュルンドを越えている。私たちもシュルンドを越えようと試みたが、危険なのでやっぱり夫妻と同じように登り返す。夫妻がbガリーを登っていたのでaガリーに取り付くことにした。さっきまで目にした晴れやかな岩場に比べ暗くてじめじめした様子のaガリー。勇んで登りはじめたのだが、途中で道がなくなり行き詰まってしまう。無念にも引き返す。時間は飛ぶように過ぎ、9時20分。ふりだしに戻った。いちかばちか、リーダーの「bガリーを登りに行こう」の声に一丸となり付いていく。bガリーの取り付けは雪溪の下になっていたが、雪溪の上からちょっと飛んで岩場に渡れた。岩と雪に挟まれてピレイ。2ピッチで横断バンドに出た。前方からスニーカー夫妻が降りて来るのが見えた。時間切れで戻るらしい。赤テープの木を左方に行くと第4尾根の取り付け。私たちも制限時間を大幅にオーバーしていたが、頑張っていく決心をする。私は有永さんと石井さんの3人組。リードは有永さんと石井さんと私

はセカンドである。第4尾根はコケのついたぬるぬるのクラックから始まる。ここはトップの有永さんを真似てレイバック。私など登る早々滑りまくってかなり必死の態である。自分ではこのクラックが一番苦労したような気がする。その後も有永さんのリードで懸命に登る。出だしに比べると傾斜も緩く楽なはずなのに、岩が濡れていていつ滑るかと思うと、そう快適な気分になれない。白い岩のクラックと呼ばれる所を通過。石井さんのリードでピラミッドフェイスの頭に出、いつの間にか足元は両サイドが切れ落ちたりッジとなっていた。恐がりの私は下がガスで見えなかったのをちょっと幸せに感じてしまう。途中ランニングがたくさん掛かった小さな垂壁があり、これが核心部であったのを後で聞いた。ここをなんと石井さんがリードしてくれたのである！第2コルを越えた頃より岩が少しずつ乾きだし、マッチ箱のコルまでのリッジは壮快。20mの懸垂下降を終えると、小さな手がかりのスラブ。ここをリードさせてもらった。嬉しくて即引き受けたが、まだ不慣れな為ぎこちない様である。この後1ピッチで登攀は終了した。堅い握手を交わし、みんなに助けられて登れた喜びをかみしめる。2人を上げて

くれた有永さん本当にお疲れ様でした。登攀具を外し、山頂までの道を急ぐ。何とか日暮れ前に北岳山頂へ到着。記念撮影後、草すべりから下る。下降路はまさに高山植物の宝庫。暗闇でヘッドランプを照らしながらも、その種類と数の多さに感動してしまった。21時白根小屋到着。ささやかな宴会が始まる。

7月21日(雨のち晴れ)

朝から雨が降りそそぐ中下山。広河原からバスを乗り継いで戸台大橋へ。メは駐車場の隣にある温泉でした。

私は岩登りの山行は今回が初めてで、登頂出来たことが本当に嬉しくて仕方がない。また登った事によって今後の課題が見えてきて、本番に行くことの大切さを実感した貴重な山行だったと思います。

<行動記録>

- 7/19 広河原 9:00 ~ 白根御池小屋 11:00
- 7/20 白根御池小屋 4:00 ~ 下部岩壁取付 5:40
- 9:55 ~ 第4尾根取付 12:00 ~ 終了点
18:20 ~ 北岳 18:55 ~ 白根御池小屋 21:05
- 7/21 白根御池小屋 6:35 ~ 広河原 8:20



2003年6月16日～6月18日

L 村田和隆 長井裕司 会員外1名

エサオマントツタベツ岳、コイカクシュサツナイ岳……、北海道には舌をかみそうな名前の山が多いが、その多くはアイヌ語に由来するものらしい。当初、バリエーション的な要素もあるカムイエクウチカウシ山を検討していたが、会員外が同行ということもあり、舌もかみそうだったので、アイヌ語で「ボロ・シリ(大きい)」を意味する幌尻岳に行くことにした。

6月16日(晴れ)

何とか手に入れた1万円程度の格安航空券で伊丹から千歳まで飛ぶ(正規運賃は3万7千円)。6月の平日だというのに千歳便は観光やビジネスの客で満席だ。レンタカーに乗り換え、国道235号線から237号線を通って、平取町までゆったりとしたドライブを楽しむ。振内というところで右折して登山口に続く道に入った。途中から砂利道となり、はるか下に沢が見えたが、ガードレールはなく、所々崩落しそうな斜面もあって、気が抜けない運転だった。空港から約3時間、そろそろ薄暗くなりかけた午後6時ごろ、出発地点のゲート前へ到着。百名山だけに平日でも少しは人がいると思ったが、我々3人だけであった。

日高は知床、夕張などと並んで日本で最もヒグマと出会う可能性の高い山域である。今回同行の2人は、柔道、水泳の選手で、クマのような体をしているが、やはりこわいと言っている。さっそく人の存在を知らせる爆竹を鳴らす。において襲われてはたまらないので、食事もテントから50メートルほど離れた場所にとった。夜中にトイレに行きたくなったが、恐る恐るあたりを見回し、早々に用を足した。

6月17日(曇り時々晴れ)

朝5時半、ゲート前を出発し、沢沿いに北海道電力の管理道路を歩き出す。1時間程で発電用取水口のある場所に着いた。ここから30分ほどで額平川の徒渉開始点に到着。川幅は普通で、一見、どこにでもあるような川だが、水量は膝ぐらいまでだったにもかかわらず、前々日に降った雨の影響か、流れが思ったより速く、徒渉点を見極めないと足元をすくわれそうになる。沢靴とストックは必携だ。沢に不慣れと思われる2組ほどが危険を感じて引き返していたようだ。ただ、私たちは、順調に進み、9時15分幌尻山荘に到着した。小屋開けは4日後の21日土曜日ということで、今は誰もいない。

ここから幌尻への登りが始まる。急登だが危ないところもなく歩きやすい。やがて広大な北カールが左手に見えてきた。雪が縞模様のように残り美しい。カール上にはヒグマがいることが多いようだが、残念ながらその姿は見えない。稜線上にはヒグマの糞とともに所々残雪があったが、アイゼンを付けるほどでもなく、順調に先へ進んだ。地元の話によると、温暖化の影響か日高も年々雪が少なくなっているそうだ。

13時45分、幌尻岳山頂(2052.4m)に到着。なんの変哲もない山頂だが、日高の山々が見渡せた。山頂を下りながら振り返ると、ガスの切れ間からその名の由来となった大きな山容をようやく垣間見ることができた。やがて七ツ沼カールが眼下に見える。紺碧の色彩バランスが見事で、今まで見たこともない美しさに見とれてしまう。ここにテントを張る人もいるようだが、ヒグマの危険もあり、絶対に避けた方がよい。

さらに痩せた稜線を戸蔭別岳めざして歩くが、16時20分、暗くなりかけたこともあり、やむ

なく戸蔦別岳手前で幕営した。

6月18日(曇り)

5時出発。戸蔦別岳は緑に覆われた円錐形のきれいな形をした山だ。5時30分、難なく頂上(1952m)に着き、先を急ぐ。しかし、やがて3級程度の岩場も出て来て、一般ルートにしてはどうも様子がおかしい。何度も地図は見直したが、ついには絶壁で行き止まってしまう。やむなく引き返すと、ルートを90度間違えていた。読図で全体の地形を捉えずに、直進のイメージが強かったこと、後続の長井さんが進む方向から登って来たように見えたこと、そして、先を焦っていたことが原因のようだった。つい数日前に、読図についてみんなにえらそうに講義したところなのに、何とも情けない。50分のロスタイムだ。でも、いい勉強になった。やはり本だけ読んでいてもわからない。

6時40分、縦走路と幌尻山荘への分岐点に到着。下山路を見下ろすと、予定している沢が大きな雪渓で埋まっている。通れるかどうか不安になったが、もう引き返すこともできず急斜面を沢までノンストップで降りる。沢靴に履き替え、沢と雪渓を越えるが、ルートは少しわかりにくかったものの、徒渉点が運良く埋まっておらず、9時、労せず幌尻山荘へと戻れた。

徒渉しながら帰る途中、前方からがさがさと

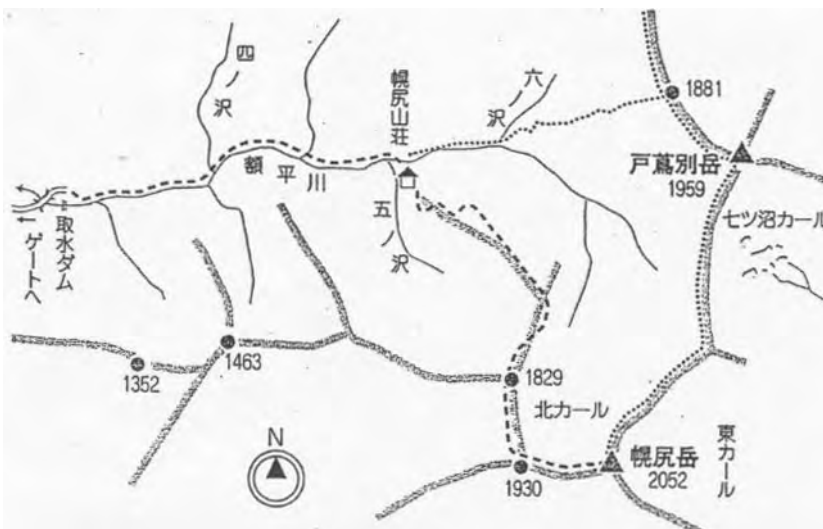
大きな枝をゆする音がした。人間にしては音が大きすぎる、ついにヒグマが出たか!と一瞬他のメンバーに大声を出して身構えたが、それは草刈り機で登山道を開きながら進む小屋開けの人たちだった。そして12時30分、出発地点へと戻る。

後日(8月12日)、NHKの夜7時のニュースで見覚えのある山荘が写っていた。台風の雨の影響で額平川が増水し、29人が幌尻山荘に取り残されたとのことだった。ヘリコプターで救助される人たちを見ながら、日高の川は舐めてはいけなかったと思った。

日高はやはり静かなる山だった。「神々の山」といわれるのもわかる気がした。ここはもう人が入ってはいけなかったのではないか。「百名山ツアー」と書いた大型観光バスが入るようになってはいけない。ヒグマをはじめとする野生動物や、植物のために大切に残しておきたい場所であると初めて感じた。

<行動記録>

- 6/16 ゲート 5:30~取水ダム 6:30~幌尻山荘
9:15~幌尻岳 13:45~戸蔦別岳手前
16:20
- 6/17 戸蔦別岳手前 5:00~戸蔦別岳 5:30~分岐点(1881m地点)6:40~幌尻山荘 9:00~ゲート 12:30



2003年6月21日(夜)~6月22日

L有永 寛 山倉康次 北山峰生 上田健二 島 太一 大崎義治 坂口温己 石井浩二 角田 浩

沢登りはBチーム以来登ってなくて、「どこかに行きたいな」と思っていたところ、丁度例会があったので参加させてもらうことにした。しかも、復路も沢を下って帰る豪華版ということで楽しみだ。川迫ダム横の作業坑跡みたいな所を今夜の宿とし、小雨をしのぐ。

6月22日

5時に作業坑跡を出発。車でもう少し上流に行き、中井谷へ取り付いた。水量は少ないが、水をバシャバシャさせながらどんどん奥に入っていく。有永さんが「先頭の人について行くだけでなく、それぞれが自分のルートを行ってみ」と言ったので、違うルートを探しながら歩いてみると、だんだんおもしろくなってきて、探検をしているような気分になる。

やがて、沢が狭くなり滝が頻繁に現れ、ザイルを使って登ることが多くなった。リードしてもらってばかりだったので、「技術を身に付けて自分で先頭に立って行けるようにならなあかな」と思った。水流は消え、ガレ場を急登すると、しゃくなげが密生する稜線に出た。姿は見えませんが、鹿の鳴き声が遠ざかっていくのが聞こえる。侵入者が来た事を仲間知らせているかのようだった。

さて、ここからはバリゴヤ谷ノ頭を経てモジキ谷を下るのだが、踏み跡はほとんどなく、悪戦苦闘した。途中、間違えて枝尾根に入ってしまった、ピークの上で立ち往生する。ガスがかかって視界が悪いこともあった。有永さんと北山さんに偵察に行ってもらっている間、ぼくらは待機する。ブヨが群がってきて大変うとうしい。有永さんと北山さんが帰ってきて「行けんことないな」ということだったが、今日は一度

も明確な所を通ってないし、大崎さんの希望もあって、予定通りバリゴヤ谷ノ頭まで行くことになった。稜線まで戻ってしゃくなげの中をかき分けるようにして歩き、バリゴヤ谷ノ頭に着いた。ここからは道がしっかりしていると思いきや、標布はあるものの荒廃していて、やっぱりしゃくなげの中をかきわけていた。ドンブリ辻に着き、ここからモジキ谷へ下りる。こんな時間から下りて行けるのかなと思うが、有永さんと山倉さんの両ベテランがいるから心強い。モジキ谷へ出合う頃には真っ暗になっていて、山倉さんに導かれるままヘッドランプをつけて沢を下る。一箇所、滝の横を懸垂下降した。暗闇の中の懸垂下降は初めてで緊張感があった。

真っ暗の中の沢下りは相当恐く、ナメ滝も連続してあり、ヘッドランプの明かりを頼りに一歩一歩確実に下りていく。ルートを見極めながら「どんどん下ってゆく山倉さんはすごいな」と思う。足元に集中して歩いていると、岩にかけた手にムニユとした感触がした。「カエルや!」当方はもちろんカエルもびっくりしたらしく、急いで逃げていった。それから注意深く岩を照らしながら歩いていると、結構たくさんいて、だいたい手につけやすい所に鎮座していた。他にも水溜まりの中などに、小魚やおたまじゃくし、サワガニ、ヤゴ等の小動物がたくさんいて、夜の沢はにぎやかだった。

やがて発電所の水取口を通り、昨夜泊まった作業坑跡に着いた時は21時半頃になっていた。充実感と疲労感たっぷりの山行だった。

<行動記録>

中井谷取付 6:00 ~ 稜線 13:00 ~ バリゴヤ谷ノ頭 16:00 ~ ドンブリ辻 17:30 ~ 川迫ダム 21:30

2003年7月24日(夜)~7月27日

L 村田和隆 角田 浩 岡本尚子

会の先輩に赤木沢のことを聞くと、みんな遠く美しいものを見るような目で「ああ、もう一度行きたいなあ」と言う。村田さんが調べてくれたインターネットの資料でも、「素晴らしい感動の連続！」などと載っていて、出発前から3人の期待は否が応でも膨らんでいった。

7月25日(金)霧雨

雨降りの中、折立駐車場から太郎兵衛平へ向かう。太郎兵衛小屋からのびる登山道は、至るところ木道がつけられていたり、石が敷き詰められたりと整備中であり、その労力は大変なものだったろう。太郎兵衛小屋から少し下り、薬師峠キャンプ地にテントを設営した後、予定通り薬師岳を往復する。

夕食後、歯を磨いていると、彼方にものすごい雲がもくもくと湧き上がっている。「雲海に夕陽が差すとおもしろいことになりますよ！」と写真家角田さん、上のほうまで見に行くというので私もお供させてもらった。陽が落ちるにしたがって、雲海と後ろにそびえる黒部五郎岳や小さく見える槍ヶ岳の山々が、オレンジ色から赤色に焼け、黒い闇に包まれていくのがちょっと怖い。山に陽が落ちるその瞬間自分が立ち会っていることに、なんとも言えぬ厳粛な気持ちがあった。村田さんも強引にお誘いすればよかったな。どこをどう撮ってよいか分からずうろろしている、「自分がいいなと思ったところを撮れば、そこが一番いいのですよ」と角田さんが言ってくださり、心強く私もシャッターを切った。

梅雨明けが例年より長引いているのが心配だったが、この素晴らしい夕焼けに、明日は絶対に晴れると信じ眠りにつく。

7月26日(土)晴れ

今日はいよいよ赤木沢だ。薬師峠BCから薬師沢小屋までの登山道はすべて木道で、とても歩きやすく、しかもしかもこの快晴!!夏の早朝に山を歩く幸せを胸にいっぱい噛みしめる。

薬師沢小屋で沢登りの準備をする。昨日の雨で増水が心配されたが、思ったほどではないようだ。ちょっぴり冷たい黒部川奥ノ廊下から赤木沢出合を目指して遡行を開始する。出合はなかなか出てこないなあ、と2人が話しているしりから、「えっ、ここはもう赤木沢じゃなかったんですか?」といつものごとくトンチンカンなことを言い、驚かれた。(というかあきられた)

出合は突然現れた。なんて美しくなんて明るい沢。3人とも早速カメラを取り出し、ここから先は撮影山行となった。奥には2段20mの滝が控えている。小滝、滑滝、階段状の滝と、そのほとんどは気持ちよく直登でき、次々に現れる豪華な滝にいつときも目が離せず、「おお~!」の連続だ。キラキラ光るエメラルドグリーン水面や心地よい川のせせらぎ、見上げるとおっきく青い空とその向こうに広がる緑の稜線。“その中を川は流れる” - 大好きな映画「A RIVER RUNS THROUGH IT」の世界だと思った。まるで日本じゃないみたい。

30mと5mの2段の大滝を最後に、離れたくない思いいっぱいで源頭部を遡行していく。両岸は高山植物が咲き乱れ、春の小川のような美しさだ。やがて沢は涸れ、遡行終了。目の前には赤木平の大草原が広がっていた。「本当に来てよかった」という村田さんの言葉に、心からうなずく。

北ノ俣岳経由で薬師峠 BC へ戻り、その日は全員食欲もモリモリ、3人で4人分のアルファ米をたいらげた。

7月27日(日)曇り

今日は、下山後、村田さんが称名滝を見に連れてくださるとのこと。薬師峠 BC から折立までノンストップで下る。称名滝は、工事のため普段見学できる場所からは見られなかったが、真向かいの山を 300m ほど登ったところから、落差日本一の迫力を十分満喫することができた。最高の場所で最高のお天気に恵まれた今回の山行、心にも体にもマイナスイオンをたっぷり浴びてきました。

もし、誰かに赤木沢のことを聞かれたら...、きっと私も言うだろうな。遠く美しいものを思い出すような目をして、「ああ、もう一度行きたいなあ」って。

<行動記録>

- 7/25 折立 7:10 ~ 薬師峠(BC)10:30 - 11:30 ~ 薬師岳 13:35 ~ 薬師峠(BC)15:05
7/26 薬師峠(BC) 5:15 ~ 薬師沢小屋 7:05 ~ 赤木沢出合 9:20 ~ 赤木沢遡行終了 12:40 ~ 北ノ俣岳 13:50 ~ 太郎兵衛小屋 15:10 ~ 薬師峠(BC) 15:30
7/27 薬師峠(BC) 5:00 ~ 折立 7:00

<M チーム>

南アルプス・黄蓮谷

湯浅升夫

2003年8月22日(夜)~8月24日

L 北山峰生 湯浅升夫

初めての南アルプスでの沢登り。今回はアイスクライミングのルートとしても有名な黄蓮谷右俣です。明るく開けたいい雰囲気の良い沢です。概して傾斜は緩いですが、岩は流水でつるつるに磨かれ、わらじでの微妙なフリクションクライミングが味わえます。今回、参加者がたった2人になってしまい残念でしたが、機会あれば訪れてみて下さい。ちょっと虫が多かったです。

8月23日(快晴)

いつものように睡眠不足で出発。ただ今回は荷物が軽いので足取りは軽い。が、30分もすると北山さんは私の視界から消えていった。他にすれ違う登山者も無く、マイペースで登ること3時間、五合目小屋に到着。ここで北山さんと合流。1時間ぐらい待ってもらっただろうか。

本に載っている黒戸の刃渡りもいまいち盛り上がり欠けた。ここまでの道のりはなだらかな登りであまり苦にはならなかった。もっと

も荷物が軽かったのが大きな要因であるが、荷物が軽いとあらゆる面で快適であることが判明した。

ここから沢を目指し、ルンゼを下る。しかし、このルンゼの下降が非常に悪かった。こんなところ冬にアイゼンで下りるのは嫌な感じになりそう、と思いつつ下ること50分、ひょっこり標布が現れ千丈ノ岩小屋に出た。ここから沢までほんの5分。(後で本を読むと、取り付きには支尾根を下る、とあった。)

沢のほとりで準備をすまし、出発。いきなりの左岸の高巻きから戻るとそこは明るく開けたきれいなナメ滝であった。これは快適と、のほほんとして歩いていたら足が滑った。ナメ滝とはいえ気は抜けないようだ。この沢は巨大な滑り台の様になっているので、変なところで滑るとどこまでも滑っていきそう。要所要所でザイルを出してもらおう。

1時間くらい(もっとかな?)沢をつめると、

行く手を雪渓に阻まれた。しかし、雪渓はトンネル状になっており、先は光が射している。距離 150m ぐらい。これを越えなければ沢登りは終了になってしまう。様子を見てくると、北山さんが雪渓トンネルの中へ、そして闇の中へ消えていった。よく見ると雪渓の中央部は亀裂が走り、強い日差しでトンネル内は雨が降っているよう。しかし、冬になるとここまで雪が積もるのかと感心した。しばらくしても帰ってこないのも私も雪渓トンネルの中へ。中は予想以上に暗い。ふと前をみると北山さんが出迎えに来てくれていた。どうやらこの先は問題ないらしい。結局、雪渓はこの 1 箇所だけであった。

再びナメ滝を登る。ザイル使用頻度も多くなってきたが、この沢には残置ハーケン類が全然無かった。というより、ハーケンを打てるようなリスが無い。かわりにクラックが多かったのでフレンズ類がかなり有効であった。(高巻きでは 2 箇所ぐらいハーケンはあった。)

快晴の下、南アルプスの天然水を浴びながらの沢登りは実に爽快でした。右手には坊主岩？、後ろを振り向くとハヶ岳。ただ、沢がうねうねしていて、沢の全貌が見えず、沢のスケールを目で確認できないのが残念であった。

高巻きも随所に取り入れ先に進む。荷物が軽くても長時間の行動で疲労、全身に水を浴びるのが少し嫌になる。なるべく濡れないようにと思うが気がつけば水をかぶっている。どうやら登り方がわるいらしい。でも 8 月の太陽がすぐに乾かしてくれる。沢登りは天気の良い日に限る。

インゼルを越えたあたりは大きな岩があり、岩小屋が 2、3 箇所できていた。ピバークも可能のようだった。今回は日もまだ高いので一気に頂上を目指す。ナメ滝も終了し、沢奥を詰める。奥の滝手前で天然水を補給。あとは甲斐駒ヶ岳頂上へ。このあたりすでに疲労気味で、最後のハイマツ帯の登り 200m は厳しかった。ハイマツ帯を抜けると頂上までほんの 50m ほどであった。

頂上には大岩で囲まれた様な空間があり、そこにツェルトを張る。頂上は風が強く、ツェルトに入るとほっとした。その夜、頂上からの夜景と満点の星空は印象的だった。

8 月 24 日 (快晴)

まだ薄暗い中をヘッドランプを灯しての出発。頂上付近は一般道にしては道が悪く、ルートを間違えたかな？と不安になったが、ほどなくして補助鎖が現れたので一安心。頂上より少し下るとテントが数張りあり。ここから赤石沢の岩場に取り付くのだろう。さらに下り、7 合目小屋、5 合目小屋へと続く。長い長い下りでしたが早く帰ってくることができました。下山後、温泉を発見することができず、そのまま帰阪になってしまったのが残念でした。

< 行動記録 >

- 8/23 竹字駒ヶ岳神社 5:00 ~ 5 合目小屋 8:00 ~
入渓 9:00 ~ 甲斐駒ヶ岳(B.P.) 17:30
- 8/24 甲斐駒ヶ岳(B.P.) 4:15 ~ 5 合目小屋 5:25
~ 竹字駒ヶ岳神社 7:40

2003年7月18日(夜)～2003年7月21日

L 榎田誠寛 松本知子 川崎智子

榎田Lから「夏合宿に行けないなら南アルプスに行かないか」とのお話を頂いたとき、「登山の経験もわずか、体力もなく、ましてや縦走は初めてとなるとついて行けるのだろうか...」とかなり不安がありました。けれども南アルプスの山々を見てみたいという思いと、同じBチーム松本さんの「一緒に行こう」の言葉に後押しされて、期待と大きな不安を抱えての参加でした。

7月19日(曇り)

6:30起床。空は雲に覆われており残念ながら天気は良くない。雨が降りませんようにと祈りながらも出発。しばらくは遠山川沿いに林道を歩く。殆ど平坦な道のため準備運動替わりとなった。西沢渡では川の増水のため歩いてはとても渡れない。先客グループも困っている様子でそうしているうちにも続々と後続グループがやってくる。ところがここには本来荷物を渡すかご渡しがあり、1人がそれに乗って対岸に渡ると、あとは1人ずつ協力し合って対岸に渡ってゆく。誰一人立ち去ることもなく、無事全員が渡り終わると皆、笑顔となった。西沢渡からは尾根伝いに急登である。途中、雨がとうとう降り出し、木々の合間から時折滴が降りかかる。大きな倒木が時折道を塞ぎ、乗り越え、潜り、重い荷物を背負っていると一動作するだけで呼吸が乱れてしまう。延々と続く登りに疲れを覚え始めた頃、ようやく聖平に到着。荷物をデポし、聖岳に向かう。頂上を踏んだ後は早々に聖平まで来た道を戻りデポした荷物を拾うと聖平小屋まで下りテントを張る。

7月20日(曇りのち雨)

やはり天気は一向に回復せず、雨はまだ降り

出していないものの空は厚い雲で覆われている。聖平まで戻り、上河内岳、茶臼岳を経て易老岳へ。そこまではなんとかついていったものの、とうとうばててしまう。光小屋への最後の登りの途中、ぱらぱらと降り出した雨があっという間に土砂降りとなりレインウェアの上だけを着ていたがズボンはずぶ濡れとなってしまった。遠くで雷が鳴り始め、山小屋へ急がなくてはと焦るものの、足は重く一歩がなかなか踏み出せない。どしゃ降りの中、何度も皆の足を止めてしまい申し訳なくなる。やっと到着した光小屋では主人の「雨が止むまで中に入っていたらいいよ」との暖かな言葉にほっとした。

7月21日(雨)

朝から降り続く雨のためレインウェアを上下共に着用。朝から一旦光岳へと登ってからテントをたたみ易老岳まで昨日歩いた道を戻る。易老岳から一時間ほど下ると雨が止み、木々の合間から晴れ間が覗くようになった。下りてくるにつれて川の音が聞こえ、あと少しだと思いついつい足が早くなる。そして易老渡到着。着いたんやあ...としばらく放心...

以上、19日から21日と連日雨に祟られた3日間、重い荷物を背負っての雨の中の縦走は思っていた以上に大変なことでしたが貴重な経験だったと思います。また反省するべきことも多くあり、今後の山行の課題としたいと思います。

最後にめげそうになるたびに引っ張っていた榎田Lと「がんばろう」と励ましてくれた松本さん。お二方にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

<Bチーム> 夏山合宿・白馬岳～雪倉岳～朝日岳

松本知子 星野安男

2003年8月14日(夜)～2003年8月17日

CL 梶田誠寛 SL 翁長和幸 松本知子 星野安男 川崎智子

8月15日(雨のち晴れ)

この合宿まで雨の山行が続いていた為、天気
の回復を願いながら、AM6:00にJR大糸線平
岩駅よりタクシーで梅池高原駅へ向かう。ゴ
ンドラリフトとロープウェイを乗り継いで約40
分、上に行くほど、どんどん雲行きはあやしく
なりロープウェイを降りたときにはもう雨が降
っていた。「また雨に降られたなあ」と思いなが
らカッパを着ていざ出発。

舗装道路をしばらく歩いて登山道に入ると、
丸太などを使った階段が続いてどんどん高度を
上げて行く。急な登りと暑さでバテてしまいそ
う、早くカッパを脱ぎたいと思いながら進む。

天狗原の木道を歩き、しばらく行くと傾斜が
きつくなる。大小の岩の間を縫うように登りよ
うやく乗鞍岳の平らな頂稜の端にでる。乗鞍岳
山頂には、およそ3メートル程もある高いケル
ンがあり、とても印象的だった。山頂を過ぎ、
岩づたいに少し下ると真っ青な白馬大池と、真
っ赤な屋根の白馬大池山荘が目飛び込んで来
た。池の水は澄んでいてとてもきれい。かなり
暑かったので、すぐに飛び込みたい気持ちにな
った。この頃には雨も上がり、山荘でやっとカ
ッパを脱いだ。様々な山の花達も疲れた体を癒
してくれる。

小蓮華岳を通過して三国境へ。翁長会長が荷物
番して下さるとの事、その他全員、空身で白
馬岳へ。雲が多く遠くの山は見え辛かったが、
「トウヤクリンドウ」や「ウルップソウ」そ
の他たくさんの花がさいていた。三国境で再び荷
物を背負い、鉢ヶ岳をトラバースして雪倉岳避
難小屋脇にテントを設営する。

8月16日(快晴)

今朝は快晴、草花に降りた露が朝日に虹色に
輝いてとてもきれい。朝日を浴びてできた自分
の影が、向いの山に出来ている。それと一緒に
山行を楽しみながら2日目出発。しばらく登る
とすぐ雪倉岳山頂。春合宿で登った白山や、鉢
ヶ岳、立山連峰が見渡せる360度の展望だ。雪倉
岳からは急な斜面を赤男山の鞍部に向かってど
んどん下りて行く。小桜ヶ原から白馬水平道分
岐を右に進み朝日岳山頂コースへ。ここからは
とても急な登りだ。途中までは林の中を歩くが、
しばらく行くと草地になる。頂上に着く頃には
かなりバテていた。五輪尾根からカモシカ坂へ
途中雪渓を横断してどんどん下る。まだか、ま
だかと登り下りをくりかえし兵馬平へ。お花畑
の中を木道が続く。しかし風景を楽しむ余裕な
どもうない。「蓮華温泉まで30分」の標示、後
すこしだ、がんばろうと自分に言い聞かせるが、
なかなか到着する様子はない。先に進むにつれ、
木道は木の登り階段になった。行けども行けど
も階段は続き、まだ登るのか……と、少し泣き
そうな気分になる。先行して到着地を確認して
いた梶田さんの「もう少しや!」の声に少し元気
が出る。最後の力を振りしぼってしばらく歩
くと蓮華温泉キャンプ場にやっと到着。「もうこれ
以上登らなくてもいい」と、開放感に浸る。

2日目の行程は想像以上に厳しく私自身の体
力不足を実感した。白馬岳は、Bチームの冬合
宿の予定コースだ。それに備えてかなりのトレ
ーニングをしなければと、改めて思った。

(松本記)

白馬岳は3度目になるが、梅池からのコース
と無雪期は初めてなので、地図とガイドブック

で豆知識を仕入れる。特に三国境から雪倉岳、朝日岳の稜線と蓮華温泉に期待する。会長の車で堺東を9時過ぎ出発。4人交替で運転、渋滞もなく越後平岩駅に到着するも待合室は先客で満杯。駅より5分位の工事現場の空地にテントを張り仮眠。

早朝、駅の横に駐車、タクシーで低く垂れ込めた雨雲に迎えられて柵池高原へ。ゴンドラ、ロープウェイと乗り継いで、途中より小雨から少し強めの雨の中、柵池平へ。天狗原を過ぎたころから雨も気にならない程度になり、白馬大池では完全に雨も上がり日差しも覗き始めた。実に雰囲気の良い所だ。合羽も脱ぎ心もうきうき、寝不足の割りに足も軽く一安心で小蓮華岳へ。予定より早いので、白馬泊まりを変更して、雪倉岳避難小屋まで足を延ばすことになった。下降から長いトラバースと雪溪の通過、お花畑に気分も上々で避難小屋に到着。小屋には3人の先客あり。小屋横にテント設営。ゆったりと時間の流れる中、テント脇で夕食。きらめく星空を眺めながら明日の天気の良い兆候と、明日の行程に思いを馳せ、蓮華温泉で汗を流せるかもしれない期待にほくそ笑む。

予定どおり6時半出発、雪倉岳の登りに挑む、最初はきつかったがだんだんと調子が出てくる頃に頂上に。小休止後下りに入る。結構きつい高度差、500m近い。小沢で水音も聞こえる様

<リーダー所感、榊田誠寛>

今年の夏休み中は、天候が不順だったにもかかわらず、我々の合宿中は、なんとか天気は、もってくれました。ベテラン3人のおじさんと、新米娘2人というメンバ-で行きました。3日の行程を2日に短縮したにもかかわらず、本格的縦走が2回目の娘2人は頑張ってくれました。若いと言うことは、すばらしい。

自分が20kgちかくの荷物を担いで朝の早くから一日中歩けるなんて、たぶん本人たちも想

になり、お花畑がきつい上り下りで萎えそうな気持ちを癒してくれる。ツバメ平から赤男山のトラバースと穏やかな下りで、小桜ヶ原を通過。すばらしい湿原と清澄な沢の流れ、規模は小さいが、白山のお花松原、トムラウシの北沼、立山の五色ヶ原に優るとも劣らない光景に大満足。水芭蕉の群落に咲く頃はどんな舞台が演出されるかを想像すると気分も高揚してくる。いよいよ朝日岳の登りだ、最初はきつく樹林帯を抜けるとやや緩くなりコバケイ草の群棲地を過ぎ頂上直下の雪溪を右に見てしばらくで山頂に、400mの登りはきつかったが頂上からの眺めは実に見事だった。

五輪尾根の下りは神経を使う。湿地に、泥土に足を取られ、花園三角点からカモシカ坂の急坂を駆け下りると言いたい所だが、やっとこさ白高地沢に降り立つ。そこから少し上り下りの繰り返しで、瀬戸川の鉄橋を越え、さほどきつくない登りで蓮華温泉キャンプ場に。「ああしんどかった」が本音のコースだった。皆さんお疲れさま。

(星野記)

<行動記録>

8/15 柵平 7:15 ~ 乗鞍岳 9:40 ~ 小蓮華岳 12:50
~ 白馬岳 15:00 ~ 雪倉岳避難小屋 17:10
8/16 雪倉岳避難小屋 6:30 ~ 雪倉岳 7:08 ~ 朝日岳 11:00 ~ 蓮華温泉 17:30

像もしていなかったと思います。近頃の風潮に逆らってしんどいことを進んでする彼女らには、貴重なことをしているのだという自覚を持ってほしいと思います。山を歩けるようになればなるほど、楽しさも倍増します。歩くのが楽しくなれば、もう山からは抜けられませんが、

冬の合宿に向けて各自モチベーションを高めていってください。

< 山行記録 >

< Mチーム >

- No.5919 稲村ヶ岳
6月14日~6月15日
L北尾 塩野
- No.5921 大峰・石仏山~中八人山
5月23日
上田
- No.5922 奥高野・法主尾山
6月2日
上田
- No.5923 幌尻岳、芦別岳
6月16日~6月20日
L村田 長井 会員外1名
- No.5924 大峰・中ノ川
6月13日(夜)~6月15日
L上田 石井
- No.5926 大峰・中井谷~モジキ谷
6月21日(夜)~6月22日
L有永 北山 山倉 上田 坂口 島 大崎
石井
- No.5929 雪彦山・地藏岳東稜
7月5日(夜)~7月6日
L杉山 北山 木下 大崎 岡本 坂口 角
田 石井 湯淺
- No.5930 錫杖岳・前衛フェース
7月18日(夜)~7月21日
L坪佐 会員外1名
- No.5931 笠ヶ岳
7月11日(夜)~7月13日
L北山 杉山 岡本 坂口 角田 石井 湯
淺
- No.5932 屏風岩
7月18日(夜)~7月21日
L北山 杉山
- No.5933 利尻山
7月12日

島

- No.5937 槍ヶ岳
8月13日(夜)~8月16日
L北尾 塩野
- No.5938 北岳バットレス
7月18日(夜)~7月21日
CL大崎 SL坂口 湯淺 石井 有永
- No.5941 北海道(トムラウシ山、大雪山、ニ
ペソツ山、石狩岳)
8月2日~8月8日
坪佐
- No.5942 北海道(十勝岳、美映岳、オプタテ
シケ山、上ホロカメットク山、富良野岳、芦別
岳、夕張岳、五色岳、化雲岳、ウペペサンケ山、
アポイ岳)
8月9日~8月19日
L宮尾 坪佐
- No.5943 鈴鹿・元越谷
7月20日(夜)~7月21日
L村田 木下 山内
- No.5944 薬師岳~赤木沢
7月24日(夜)~7月27日
L村田 角田 岡本
- No.5946 夏山合宿・劔岳周辺
8月12日(夜)~8月17日
CL杉山 SL北山 西村(晶) 有永 長井
名越 山内 大崎 岡本 角田 石井 湯淺
山倉 永井
- No.5948 行者還岳~弥山
7月26日(夜)~7月27日
L木下 北山 坂口 湯淺 西村(晶)
- No.5949 大峰・神童子谷
8月23日~8月24日
L角田 会員外2名
- No.5950 南アルプス・黄蓮谷
8月22日(夜)~8月24日

L北山 湯淺
No.5951 大峰・中ノ川
8月29日～8月31日
L角田 会員外1名
No.5953 笠ヶ岳
8月29日(夜)～8月31日
L笠松 山内 沢 島 会員外1名
<Bチーム>
No.5918 白髭岳
5月31日(夜)～6月1日
L榊田 星野 谷村 田島
No.5925 百丈岩
6月14日(夜)～6月15日
L榊田 木下 島 星野 松本(知) 川崎
No.5928 台高・迷岳
6月28日(夜)～6月29日
CL吉田 SL榊田 松本(明) 谷村 星野
川崎 松本(知) 池間
No.5934 聖岳～光岳

7月18日(夜)～7月21日
L榊田 松本(知) 川崎
No.5935 転付峠～策ヶ岳～山伏
7月18日(夜)～7月21日
星野
No.5936 岩湧山
7月12日(夜)～7月13日
L榊田 谷村 松本(知) 川崎 向井 西川
No.5945 金剛南尾根
7月26日(夜)～7月27日
L榊田 翁長 石井 安岡 谷村 松本(知)
川崎 向井 星野
No.5947 夏山合宿・白馬岳～雪倉岳～朝日岳
8月14日(夜)～8月17日
CL榊田 SL翁長 松本(知) 川崎 星野
No.5952 奥ノ深谷
8月30日(夜)～8月31日
CL杉山 SL榊田 岡本 松本(明) 谷村
安岡 松本(知) 川崎 星野 西川

<編集後記>

今年は梅雨が長く、8月に入ってから、停滞前線のために不安定な天候が続きましたが、個人山行が活発に行われ、山行内容が充実していると感じていただけるのではないのでしょうか。

泉州山岳会では、年3回の合宿はレベルアップを図る場と位置づけています。しかし、合宿で身につけた力を本当の実力にするためには、個人山行をどんどん行うことが大切だと思います。今年は残暑が厳しく秋の訪れが遅れていますが、個人山行をするには絶好の季節がやってきます。紅葉の中の岩登りや沢登り、のんびりとした山歩きや写真山行など、これまでに身につけた力を存分に発揮して、それぞれの人が好きな山登りを追求してもらえればと思います。

今年は異常気象のため、思ってもいない時期に降雪に遭遇するかもしれません。気象の変化

には注意し、防寒対策を十分にしてお山を楽しんでください。そして、秋山号に個人山行の記録を報告して下さい。お待ちしております。

(杉山記)

泉州山岳会会報 「葛城」
第64年3号(通巻332号)
2003年夏山号
編集人 杉山 僚
発行所 泉州山岳会
〒590-0027
堺市榎元町2-1-9小野木ビル3F
TEL&FAX 0722-21-4454
<郵便口座>
記号14130番号74088061
名義 泉州山岳会